沿　革

昭和 44 年 2 月 26 日	「県立自然科学博物館設置について」県議会に請願が行われた。
昭和 44 年 6 月 5 日	県議会において請願が採択された。
昭和 48 年 6 月	兵庫県自然保護協会から環境保全・自然保護活動の分野の博物館設置について要望書が提出された。
昭和 51 年 5 月	IFHP兵庫国際会議が開催され、人間居住環境研究センターを設置する必要性が認められた。
昭和 59 年 4 月	自然系博物館建設調査費が予算計上された。
昭和 61 年 12 月	兵庫県立自然系博物館建設基本構想（報告）が策定された。
昭和 63 年 8 月	自然系博物館は三田市のホロンピア館を活用して建設することが決定した。
平成元年 4 月 1 日	兵庫県教育委員会社会教育・文化財課に自然系博物館（仮称）設立準備室が設立された。
平成 3 年 12 月	研究・収蔵棟が完成した。
平成 4 年 3 月 25 日	本館（ホロンピア館）の模様替え工事が完了した。
平成 4 年 4 月 1 日	兵庫県立人と自然の博物館の設置および管理に関する条例および同規則が施行され、同時に人と自然の博物館内に姫路工業大学自然・環境科学研究所が設立された。
平成 4 年 6 月 25 日	ジーンファームが完成した。
平成 4 年 9 月 20 日	エントランスホールが完成した。
平成 4 年 9 月 30 日	コートヤードゾーン、屋内展示工事、情報センター設備が完成した。
平成 4 年 10 月 9 日	兵庫県立人と自然の博物館開館および姫路工業大学自然・環境科学研究所開所の記念式典が挙行された。
平成 4 年 10 月 10 日	開館。
平成 9 年 6 月 14 日	マレーシア国立サバ大学と国際学術交流協定を締結した。
平成 9 年 11 月 4 日	文部省の科学研究費補助金取扱規定による研究機関に指定された。
平成 10 年 3 月 12 日	日本育英会施行令による日本育英会の第一種学資金の返還を免除される職を置く研究所に指定された。
平成 11 年 11 月 13 日	NPO 法人「人と自然の会」（博物館ボランティア）と協力協定を締結した。
平成 13 年 4 月	兵庫県教育委員会行政組織規則の改正に伴い、博物館の組織が大きく改編され規則の改定を行い、博物館事業の新展開を公表した。
平成 14 年 4 月	博物館事業の新展開を着実に推進するために、平成 18 年度までに実現させる数値目標と考え方を示した中期目標を公表した。
平成 14 年 10 月	博物館が開館 10 周年を迎え、10 周年記念式典を執り行った。
平成 16 年 4 月	県立大学の統合に伴い、博物館に設立する研究所を兵庫県立大学自然・環境科学研究所に改称した。
平成 18 年 6 月	猪名川町と協力協定を締結した。
平成 18 年 9 月	丹波地域で恐竜化石が発見され、発掘を開始した。
平成 19 年 3 月	新たな「兵庫県立人と自然の博物館」基本構想を策定した。
平成 20 年 3 月	新たな「兵庫県立人と自然の博物館」基本計画を策定した。
平成 20 年 4 月	「ひとはく恐竜ラボ」がオープンした。
平成 21 年 7 月	加東市と協力協定を締結した。
平成 21 年 8 月	佐用町昆虫館と連携協定を締結した。
平成 22 年 6 月	篠山層群における恐竜・哺乳類化石等に関する基本協定を締結した。
平成 24 年 10 月	博物館が開館 20 周年を迎え、20 周年記念式典を執り行った。
平成 25 年 3 月	「ひとはく将来ビジョン」を策定した。

ひとはく将来ビジョン

ひとはくは、開館 20 周年の節目にあたり、これまでの成果を振り返るとともに、変化する社会状況に対応しながら、いま、実践すべき戦略を検討し、これからのひとはくが目指すものを示した「ひとはく将来ビジョン」を描き上げました。このビジョンは、ひとはくの今後あるべき姿を描くと同時に、日本の博物館の進むべき方向を示唆するものであると考えます。ひとはくは、これからもみなさまとの協働を通じて博物館と地域の未来について思索し、行動し、提言し続けていきます。

創造と共生の舞台･兵庫で県民のみなさんと共演する生涯学習院

生涯学習院とは、①驚きや喜びを感じ、自発的で自律的な学びを支える／②県民の参画と協働で、知識だけでなく創造性を育む／③年齢や立場などによる、様々な学習のかたちに対応する／④感じるから伝えるまで、トータルな学習プロセスを提供する／これらを実現できる「県民が集い、学び合う参加・交流型の博物館」です。

【実現に向けた5つの行動指針】

■ 5 つの行動指針で進める「生涯学習院」

これまでひとはくでは、多彩なセミナーや館外へのアウトリーチ事業などによって、県内外の多くの方々に様々な学習の機会を提供してきました。これまでの展示とは違った、利用者とモノ、利用者と空間との間に人が介在することで、興味を持ってもらったり、参加してもらったりすることができる「演示」という仕掛けを用いて、学びのサイクルを生みだすことを試みてきました。

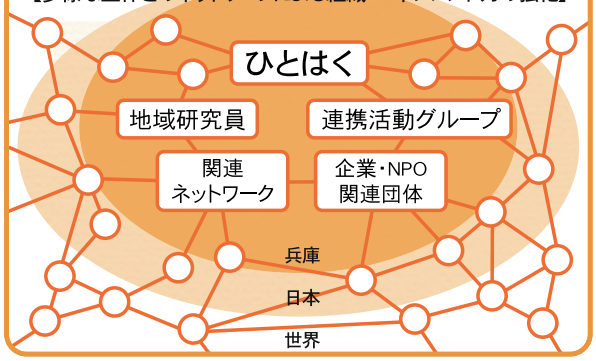
今後は、このような取り組みをさらに進めていくために、上図の 5 つの行動指針を定めて、さらなる展開を図ります。

【来館者が主役となるような演示の舞台としてのハード整備】

■「演示」による生涯学習プログラムのさらなる実践

演示の手法を活用した生涯学習プログラムによって目指すべき博物館像を実現して行きます。先行して実践を進めてきたソフトだけでなく、未だ実現に至っていないハードについても、博物館の根幹機関である収蔵庫や演示の実践の舞台について整備を進めていきます。

【多様な主体とのネットワークによる組織･マネジメント力の強化】



■多様な主体との連携によるマネジメントの仕組みづくり

多様な主体が関われるオープンなネットワークを形成するため、マネジメント組織の設立や民間との連携を図り、ひとはくの活動効果をさらに高めていきます。また、兵庫県立大学と一体となった組織体制をより一層活用し、ひとはくにとっても大学にとっても相乗的な効果があげられるような仕組みを構築していきます。

常設展示の概要

○ 本館３階

■　兵庫の自然誌

兵庫県は日本海と瀬戸内海・太平洋に面した数少ない県で、北部の多雪地帯から南部の暖温帯まで、多様な自然があります。人々の生活は多様な自然の影響を受けていますが、人々の生活、も各地の自然のありように強く影響を与えています。　ここでは、但馬、丹波、播磨、摂津、淡路の特色ある自然を標本、映像、ジオラマなどで紹介します。「森に生きる」には、兵庫県の野生動物をはく製で紹介しています。

■　人と自然

先人達がいかに自然とうまくつきあってきたか、現在その関係が急速に変化していることを、ジオラマ・映像などで紹介するとともに、“モノ”と“ゴミ”が、豊かな暮らしのあり方や環境問題を問いかけます。

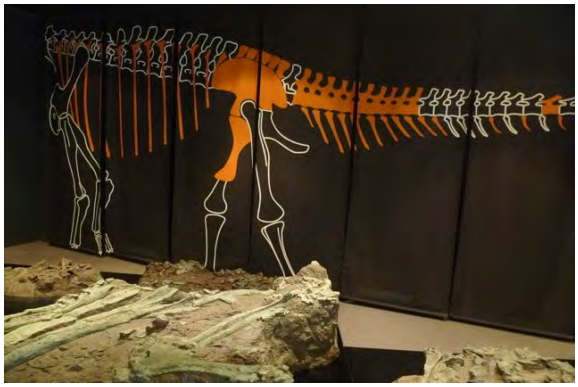
■ナチュラリストの幻郷

博物館の収蔵庫には多くの方々から寄贈していただいた資料が集められています。

このコーナーでは江田茂氏による 27 万点に及ぶ昆虫コレクションや小林桂助氏による貴重な鳥のコレクションをはじめとする、コレクション類の一部を紹介しています。

■丹波の恐竜化石

2006 年 8 月に丹波市山南町で発見された大型草食恐竜化石の肋骨、尾椎、血道弓などを展示しています。同じ場所で見つかった他の恐竜の歯、小動物の化石なども随時展示しています。



○ 本館２階

■ 水生生物の世界

川や海といった水中に暮らす生物の食物連鎖や環境への適応を展示しています。淡路のナガスクジラの骨格標本、アオザメの本剥製や川の上中下流の魚類などの標本があります。

■ ひとはく多様性フロア ～魅せる収蔵庫トライアル～

開館から 20 年間に寄贈された標本や館員が収集してきた標本などの一部を、一般の来館者にみえるように配置しました。これらの標本は、間近で観察することができます。セミナーや講義など、その場で研究員が解説する「演示」の手法で双方向での対話型の学習にも活用されます。

○ 本館１階

■ 地球・生命と大地

約 35 億年前の生命の誕生から人類誕生までの生物の歴史を多くの化石標本でたどります。また、森林の多様性、地球のプレート運動、日本列島の生い立ちを紹介します。

■共生の森

ラフレシアやオランウータンなど赤道直下のボルネオ島の貴重な標本類を展示しています。生物多様性の豊かな熱帯雨林を体感しながら学ぶことができます。

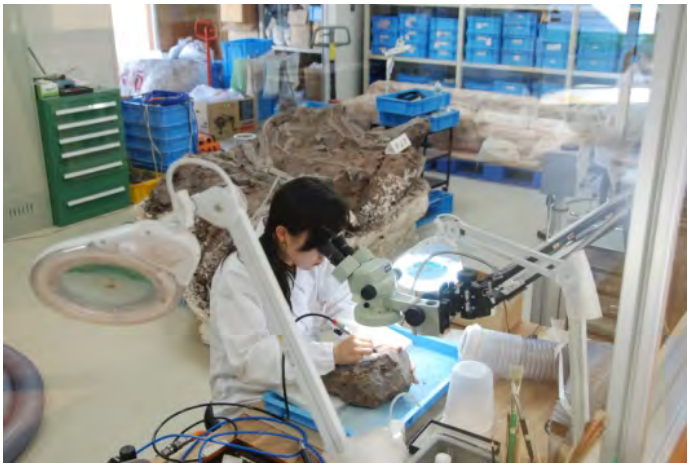
○ 本館４階

■ひとはくサロン

自由に閲覧できる「図書コーナー」や、自然環境についての最新の情報が集められている「情報コーナー」のほか、「さわれる標本コーナー」「休憩コーナー」などがあります。平成 26 年度末、情報システム更新に伴い一部改修が行われ、博物館の標本や情報によりアクセスしやすい環境が整いました。

○ ひとはく恐竜ラボ

恐竜化石のクリーニング作業及び展示等を行う施設として「ひとはく恐竜ラボ」が 2008 年 4 月にオープンしました。研究員などによる作業風景を間近に見ることができます。



※ 移動博物館車『ゆめはく』

ひとはく開館 20 周年にあわせて、2012 年に移動博物館専用の 2t 車「ゆめはく」を導入しました。「ゆめはく」は、車体がそのまま展示室になります。これによって、まったく展示施設のないところでも、さまざまな資料を展示することができるようになりました。

施設の概要

(1) 規模

・敷地（設置許可・使用承認面積）：37,988m^2、延床面積：18,951 m^2

(2) 建物構造

・本館（鉄骨 4 階建） 建面積：4,221 m^2、延床面積：12,222 m^2

・エントランスホール（鉄筋コンクリートドーム型） 建面積：360 m^2、延床面積：360 m^2

・研究、収蔵庫棟（鉄筋コンクリート 3 階建） 建面積 2,327 m^2、延床面積：5,988 m^2

・ジーンファーム管理棟（軽量鉄骨平屋） 建面積 121 m^2、延床面積：121 m^2

・ひとはく恐竜ラボ（鉄骨平屋） 建面積 260 m^2、延床面積：260 m^2

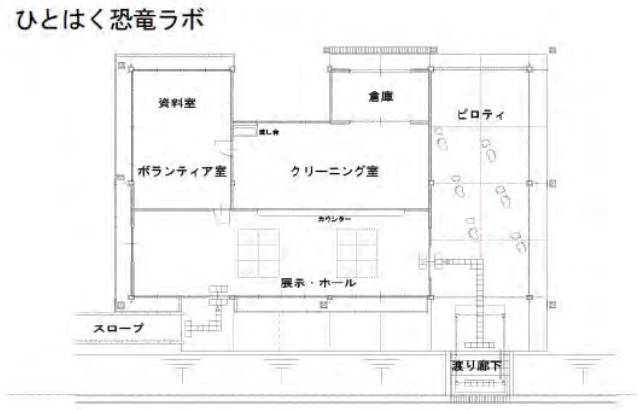
(3) 施設の概要

・本館（鉄骨 4 階建）

建築家丹下健三氏の設計による全面ハーフミラー張りの建物。展示関係のスペースをはじめとして、研究部・総務課・生涯学習課・情報管理課を設置。さらに 500 人収容のホロンピアホールも設置。

・ひとはく恐竜ラボ

恐竜等の化石クリーニングを進めるための施設。クリーニング室、資料室、倉庫のほか、作業を公開し、発掘調査の成果を展示するホールを設置。



・ジーンファーム

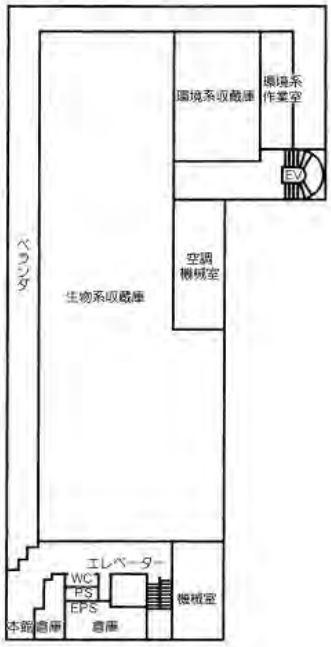
ジーンバンク事業を実践とする場として圃場・ガラス室・研究温室・育成温室・昆虫網室、管理棟を設置し、主に県内産の重要植物の保護・増殖に活用。

・研究、収蔵庫棟（鉄筋コンクリート３階建）

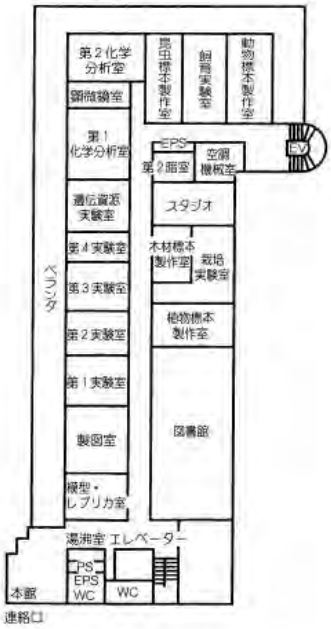
研究や資料整理のための各設備と資料の保存条件に合わせた各収蔵庫を設置。屋上には植栽を実施。

１階

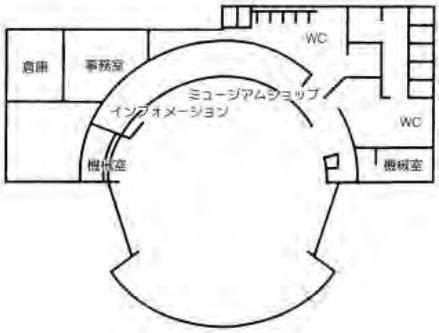
２階



３階



エントランスホール



・エントランスホール（鉄筋コンクリートドーム型）

博物館への導入的役割を果たしているハーフミラー張りでドーム型屋根の建物。観覧券の発売や博物館の総合案内を実施。

(4) 施設状況

・展示関係：4,124 m^2

・管理関係：349 m^2

・収蔵関係：2,966 m^2

・研究関係：2,105 m^2

・教育普及関係：1,324 m^2

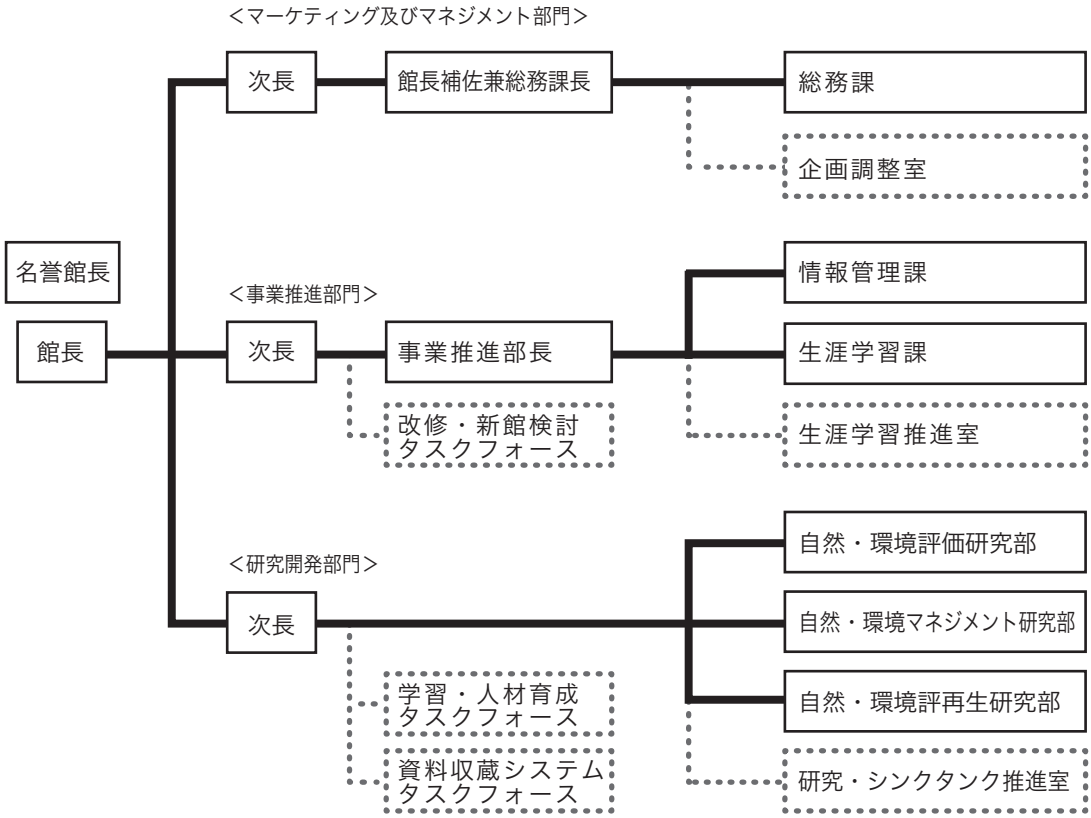
・エントランス：360 m^2

・機械、その他：7,723 m^2

組織と職員

(1)組　織　図

平成 27 年 4 月 1 日現在



※ 実線は行政組織規制上の職制で，点線は館長辞令による博物館独自の職制（研究員の兼務）

(2)職　員　数

平成 27 年 4 月 1 日現在

区　分	事務職	研究職	技能労務職	非常勤嘱託員	合　計
総務課	6		1	3（館長・名誉館長）+3※2	13
情報管理課	2			2※2	4
生涯学習課	4			3※2	7
自然・環境評価研究部		6 （併任 6※1）		1※3+3※2	10 （併任 6※1）
自然・環境マネジメント研究部		5 （併任 8※1）		6※2	11 （併任 8※1）
自然・環境再生研究部		2 （併任 5※1）		2※2	4 （併任 5※1）
合　計	11	12 （併任 18※1）	1	23	48 （併任 18※1）

※1（併任）は兵庫県立大学　自然・環境科学研究所教員の併任、※2 県政推進事務員、※3 化石整理技術指導員

(3) 職員配置　（平成 27 年 4 月 1 日現在）

名誉館長	河合　雅雄
名誉館長	岩槻　邦男
館長	中瀬　勲
次長（事務系）	坂田　昌隆
次長（研究系）	太田　英利
次長（事業系）	田原　直樹
館長補佐	光川　安則
事業推進部長	高橋　晃

【マーケティング及びマネジメント部門】

■総務課

課　長	光川　安則
主　査	西村　敦
事務職員	広岡　由記子
事務職員	沖　祐美子
事務職員	東　成一
技　師	塚本　健司

■企画・調整室（研究員兼務）

室　長	八木　剛
副室長	鈴木　武※
主任研究員	半田　久美子
主任研究員	和田　年史※

【事業推進部門】

■情報管理課

課　長	船越　充
指導主事	中前　純一

■生涯学習課

主任指導主事兼課長	八尾　滋樹
主任指導主事	橋尾　和紀
教育事務推進専門員	笹倉　達義
社会教育推進専門員	余田　敏

■生涯学習推進室（研究員兼務）

室　長	小舘　誓治※
副室長	藤本　真里※
主任研究員	高野　温子
研究員	黒田　有寿茂※
研究員	上田　萌子
研　究　員	菊池　直樹
研　究　員	高木　俊

■改修・新館検討タスクフォース（研究員兼務）

リーダー	橋本　佳明※
サブリーダー	三橋　弘宗※
研究員	池田　忠広

【研究開発部門】

■自然・環境評価研究部

研究部長	佐藤　裕司※

（地域環境地質研究グループ）

研究部長	佐藤　裕司※
主任研究員	加藤　茂弘
研　究　員	菊池　直樹

（埋蔵自然遺産研究グループ）

主任研究員	古谷　裕※
主任研究員	三枝　春生※
主任研究員	半田　久美子
研　究　員	池田　忠広

（森林多様性研究グループ）

事業推進部長	高橋　晃※
主任研究員	秋山　弘之※
主任研究員	高野　温子

（昆虫共生系研究グループ）

次　長（研究系）	太田　英利※
主任研究員	橋本　佳明※
主任研究員	八木　剛
主任研究員	山内　健生※

■自然・環境マネジメント研究部

研究部長	高橋　鉄美※

（流域生態研究グループ）

研究部長	高橋　鉄美※
主任研究員	三橋　弘宗※
主任研究員	和田　年史※

（動物共生研究グループ）

主任研究員	三谷　雅純※
研　究　員	布野　隆之
研　究　員	高木　俊

（コミュニティデザイン（多自然居住）研究グループ）

主任研究員	藤本　真里※
主任研究員	赤澤　宏樹※
研　究　員	大平　和弘

（コミュニティデザイン（都市再生）研究グループ）

次　長（事業系）	田原　直樹※
研　究　員	上田　萌子

■自然・環境再生研究部

研究部長	石田　弘明※

（植生創出研究グループ）

研究部長	石田　弘明※
研　究　員	小舘　誓治※
主任研究員	橋本　佳延

（生物多様性保全研究グループ）

主任研究員	藤井　俊夫
研　究　員	鈴木　武※
研　究　員	黒田　有寿茂※

■研究・シンクタンク推進室（研究員兼務）

室　長	橋本　佳延
主任研究員	三谷　雅純※
研　究　員	大平　和弘

■学習・人材育成タスクフォース（研究員兼務）

リーダー	赤澤　宏樹※
サブリーダー	加藤　茂弘
主任研究員	石田　弘明※

■資料収蔵システムタスクフォース（研究員兼務）

リーダー	秋山　弘之※
研　究　員	布野　隆之
主任研究員	山内　健生※

※ 兵庫県立大学 自然・環境科学研究所教員（併任）

各研究部の概要

■自然・環境評価研究部

自然環境保全の基盤となる地形学や地質学、過去と現在の生物を対象とした分類学や形態学、生物地理学等の分野の調査研究と資料収集活動に取り組んでいます。

本研究部では、これらの成果に基づき、過去から現在、そして兵庫県から地球レベルにいたる自然環境の変遷や生物相の由来、生物多様性を創出し維持している共生関係の解明を進め、自然環境保全のための有効な提案を行っていきます。

■自然・環境マネジメント研究部

人間の生活は、農山村はもちろんのこと、都市においても自然と深く結びついて成立しています。人間による自然へのインパクトが強力になっている現在、自然と環境のマネジメントが不可欠になっているのは、このことによります。

本研究部では、人間と野生動物の共存、自然と調和した地域づくり、都市の再生などに関する資料収集・調査・研究を行い、未来の人と自然のあり方を探求します。

■自然・環境再生研究部

植生・植物に関する保全生態学や保全生物学の研究を行っています。現在、さまざまな要因によって自然が破壊され、里山林や半自然草原などの植生やフジバカマ、エビネ、カザグルマなどの植物が危機的な状況にいたっています。

本研究部では、そのような状況にある植生や植物の保全・復元・創出活動を積極的に進めています。このような活動を通じて、県下の植生・植物の生態情報の収集や貴重種のジーンファーム（ジーンバンク機能を果たす圃場）における増殖などの事業も展開しています。